

パリ、ニースの旅

鍋島 淳子

十二時のニコライ堂の鐘の音を 聞きて飛び立つ胸高鳴りつ

伊野部敦子さんと宮地春美さんのお誘いで2012年10月15日羽田空港を飛び立ちました。

ドゴール空港には伊野部さんのお知り合いの方が二人、迎えてくださりオペラ座の西隣の豪華なホテルに入りました。ゆったりした機内のお蔭で、疲れも無く荷物を置くとすぐ外出しました。

パリだ！パリだ！と大はしゃぎしてマドレーヌ通りのカフェカプチーネのテラスでお昼を食べました。パリに長い福本さんに「生牡蠣ないかしら？」と聞くと「ある、ある」と言う事で到着早々



待望の生牡蠣を半ダース頂きました。氷に乗せられて来た大きな牡蠣が喉をツルン！美味しいです。グラスワインが欲しいところでしたが、食事の後に高級ブティックをまわることになっていたので、控えました。

伊野部さんのお知り合いの福本さんは洋画家だったご主人を最近亡くされてパリのアトリエや住居の整理をされているところでした。もう一人の森木さんはご主人がフランス人でパリで暮らしておいでるようです。

携帯に目覚ましをセットし早々に休みました。ベルに起こされて重たい顔を上げて見るも真っ暗です。六階の窓から通りを見ると、沢山の人通り え！これ朝の六時？何時だろ。私がフロントへ行くことになりました。会話が出来ないから、「地球の歩き方」を持って行き、ベルサイユのページを見せて「トモロウ」「モーニングコールプリーズ」と言いました。

朝六時にコールがあり、やれやれでした。フロントへすんなり行けたわけではありません。



せんでした。部屋のドアカードを何階で降りるかその番号に差し込まないとエレベーターが止まりません。フロントが1階と思っていたら0階でしたので、一回目は失敗しました。どうしようかと困っていたら男性が乗って来てフロントで降りたので続いて降りました。

伊野部さんの会話は凄いと思います。飛行機を降りて、入国管理を通り、モノレールで移動して、荷物を受け取りに行き、ホテルのチェックインまで、全て伊野部さんの腕一つに頼りました。

彼女曰く、土佐高の映研クラブで、川村愿さんや岡村毅郎さんと放課後洋画を見に行つて、熱心に英語の勉強をしたそうです。あんまり映画へ行くので毅郎さんのお母さんが、松浦先生に相談したら、「暗い処が良うて行きやせんから、ええですらう」とおっしゃったとか。頭の良い方ばかりだから信用厚いのです。

《17日》なんと贅沢な朝食でしょう。一番先に目に入ったのは生ハムです。その大きい事。ダルマイヤーだったら一枚四百円位しそうです。「地球の歩き方」でホテルスクリーブを見てみると一泊470ユーロでした。

いざ ホテルを出てみると外は真っ暗です。びしゃびしゃ雨が降って寒いし、

昨日のパリとは大違いでした。すぐ近くにある筈のマイバスの発着所へ曲がる角の、カフェの赤い庇が目印なのに、歩けど歩けど見えないのです。

伊野部さんが、行き交う人に必死で尋ねるのに、パリジャンには用の無い処らしく誰も知らないのです。そこにタクシーが通りかかって、ようやくマイバスという言葉が通じました。けれど「そこだよ」とゼスチャーをして乗せてくれようとしなかったのを「乗せてよ！」と無理矢理に乗ったら、100位走った所にありました。こんなに可笑しい事があるのかと、三人で大笑いしました。家に居ては、ここまで必死になる事がないので面白くてたまりません。

ベルサイユに来るのは二度目ですが
ゴルドの柵や門番には覚えがありません。
お土産売りの黒人に追っかけられた事を思い出しました。

初めて「ナポレオンの戴冠」(写真下)を見た時、桁外れの大きさにびっくりしました。ドラマチックな美しさ、そ



して登場人物の多さに驚くばかり、でも、皇帝になったのはナポレオンなのに、何故王妃の頭に？と不思議でしたが、ジョセフィーヌへの深い愛の表現が同時戴冠となり、これほどまでに大きな絵画になったのだと、理解しました。

(写真はベルサイユの鍋島)



華麗に裝飾された部屋が続きます。ゴブラン織り、ビロード、ベツチン、椅子に壁にカーテンに、ベッド、垂れ幕、王のマントに縁取りのゴールドや毛皮にマッチする織物の素晴らしさに見とれていて、二人にはぐれてしまいました。

一人になると集合時間が気になって、バスへ戻りました。観光バスはざっと数えて二十六台、次々出発、次々到着、一人150ユーロです。

《私の学習》 シャルル九世が亡くなり続いてカトリーヌ・ド・メデイシスも亡くなりました。シャルル九世には世継ぎがなかったのでバロワ朝は終わりま

した。ナパール国の王子アンリブルボンがアンリ四世になって、ナントの勅令を出して宗教の反目を治めるが、暗殺されて、息子のルイブルボンは八歳でルイ十三世となり、次のルイ十四世は四歳の国王。宰相リシュリユウにつづき宰相マザランの外交力で平和裡に国力をつけた。ルイ十五世の時アメリカ独立戦争に肩入れして、イギリスと戦って敗北しフランス経済は困窮に向いて行く。

次のルイ十六世は、派手派手の太陽王のおじいさんと、十五世のやり手の父の付けを、マリーアントワネットと共に被ったのです。六人の王の中で一番優しく真面目、王妃アントワネットの他に愛した女性は、一人も居なかったのです。

《18日》 二階建てオープントレーン（バス）で市内観光をします。マドレーヌ寺院の前でバスに乗れる筈ですが、私達は寺院の東側から北へ向いて歩き始めたので、バス停が見当たりません。走っているバスに「乗せて！」と手を振ると窓から手を振ってくれるだけです。市バスの停留所にいた女性に三人三様の言葉で、チケット売り場を教えてくださいました。

《私の学習》 バロワ朝はフランソワ二世に次いでシャルル九世となる。十歳の王の後見を皇太后カトリーヌ・ド・メディシス。カトリックとプロテスタント

の絶えない争いを治める為に、プロテスタントの統領アンリ・ナパール・ブルボ

ンと美しい愛娘マルグリット・バルボワを政略結婚させた。が結婚の祝いに集まったプロテスタントの虐殺となり、何故かカトリーヌはアンリを何度も毒殺しようとする。

悲劇の二人は正式に離婚。しかし不思議なのは、アンリ・ナパールです。再婚の女性にメデイシス家のマリー・ド・メデイシスを迎えて目出度く王子を設け、ルイ十三世となりました、数奇な運命を乗り越え乗り越え、フランスの王になったアンリ四世の生まれ故郷のナパール国は何処だろうと思っていましたら、テレビ「世界の温泉」で見つけました。(写真はパリにあるアンリ四世像)

スペインとの国境ピレネーの山深い温泉郷に、ナパール城があります。王子アンリの部屋、ア

ンリの彫像。街の名はポーです。近隣にカトリックの聖地ルールドがあつて巡礼



で賑わっていました。

カトリックの聖地の近隣に生まれ育って、アンリナパールは何故プロテスタントの統領でしょう。

《18日》 セーヌクルーズに出かけました。

エッフェル塔の側から観光船に乗り込みましたが、十年前に乗った船（写真左下）とは大違い。シャソンを聞きながらフランス料理を頂きました。両岸の建物と潜って行く橋は綺麗にライトアップ

されていますがあまり見ている人は居ません。

十年前はお食事が無かったから、部屋を出て一生懸命見ました。探照灯で照らしていました。

《19日》 朝早く福本さんが迎えに来てくれ

て、先ず両替、次にワイン専門店へ。市バスに乗ってニット専門店へ。昼ご飯はオペラ通りを東へ





ちよっと入った和食の「国虎屋」。高知安芸市の「うどん国虎屋」のパリ店です。（写真上）よく冷やした前菜のまぐろの美味しいこと。小さくサイコロに切つてある所は、お刺身と違う、フランス人の好む食感を意識しているようでした。パリで頂くうどんは絶品です。ご馳走になって嬉しかったです。

ホテルへ帰って一休みしました。

ゆつくりオペラ鑑賞の準備を始めました。ところが私は、大変なことになりました。

伊野部さんと私のチケットが見つかりません。何故か私が二人のを持っていて、大切だからちよっとになっていきます。泣きそうになりながらも一度スーツケースをひっくり返して探しました。中の仕切りのポケットに移していました。有って良かった。

A4サイズのチケットが見えなかったなんて、頭の中真っ白でした。三人とも綺麗になりました。幾つになっても綺麗になることは幸せです。

オペラ座（写真右下）の前は、待ち合わせの人々で大混雑でした。

ストラビンスキーの近代的なオペラ親に反対される若い二人が紆余曲折の末にめでたく結ばれるストーリー。艶やかな二人の歌声に聞き惚れている内、フランス語分らないから、トロトロ眠ってしまいました。目覚めた時の衝撃！舞台は二階建てになっていて、その上も下もセックスに溺れる男と女がいっぱいいます。（写真はオペラ座の鍋島）

昨日はチャイコフスキーの「白鳥の湖」でしたが、早くから満席だったのです。



かにかくに 口に出せねど おかしけれ たゆたえど 沈まぬバリ

自由 平等 博愛のフランス 冥土の主人へお土産話にします。

《20日》 印象派モネの「睡蓮」連作をオランジュリー美術館で鑑賞して、リポリ通りのアンジェリーナチョコレート屋さんで、「お菓子の好きなパリ娘」を思い出してエクレアを買いました。

お昼は、生牡蠣を食べた「カプチーネ」で、今度こそワイン エスカルゴ オニオンポタージュ・スープをオーダーしました。

待つ事しばし バターとニンニクの香ばしい匂いがして来ました。

ジュージューあつあつのエスカルゴを十年振りに頂きました。

食べ放題の生ハム、生牡蠣、ジュージューあつあつエスカルゴ、これを食べられただけで、はるばるパリまで来た甲斐があったと言うものです。

主人も大好きでした。私が食べたらあの世の主人も きっと 美味しいのです。

《21日》 パリ最後の一日になりました。



オルセー美術館
ではミレーの「落穂
拾い」や「晩鐘」が
「よく来てくれました
たね」と言ってくれ
たように思いました。
印象派は五階でした。



（写真上はオルセー美術館前の三人。後ろはルーブル美術館）
ミレーの絵の前で下の写真を写したので、この後、警備員が飛んで来ました。

《21日午後》 伊野部さんと宮地さんはルーブル美術館へ行きました。

私はもう一度パリへ行くチャンスがあったらナポレオンの柩を拝みたいと思っ
ていました。

リポリ通りで二人に別れて、チェイルリー公園を横切り、モネの睡蓮を見たオラ
ンジュリーまではすぐに着きました。

5、6段階を降りてコンコルド広場(写真)女神に囲まれた噴水や聖人の彫像が、平和や協調を祈って立っている中にロゼッタストーンの文字を シャブリオンが読み解いたお礼に、エジプトよりムハメド・アリから贈られたオベリスクが高々と建っています。

その遙か彼方に、私のこれから行こうとしている、アンバリッド院の丸い擬宝珠が金色に輝いています。3キロ位を覚悟してセーヌ沿いの並木道を歩きました。シャンゼリーゼの騒音も聞こえない、ジョギングする人に会うぐらいで シンと静かになりました。

前回の旅行の後で興味が沸いて、「王妃マルゴ」と「ナポレオン」を読みました。それまでナポレオンは一人しか居ないと思っていました。ナポレオンの略年譜では1784年10月22日に王立陸軍士官学校に入校しています。229年前の明日です。些細な偶然に嬉しくなりました。

次第に人通りが多くなってきました。アレキサンドル三世橋に着きました。パリ万博の時出来たそうで華美絢爛な彫刻で飾られた欄干、四隅の高い柱には片足で今にも飛び立ちそうな黄金のエ



ンジェル。使われた純金が何トンと言ったか聞き漏らしましたが、ライトアップされた夜は格別綺麗でした。エアーターミナルの両側には緑の芝生が広がって子供連れでにぎわっています。私もそこに寝転びたい位疲れました。

軍事博物館へようやく辿り着きました。案内板が読めないから、矢印に従って歩いたら二階の博物館へ行ってしまうました。そこに制服の軍人が出て来たのでほっとして、「ナポレオンの柩を拝ませてください」と日本語でお願いしました。

礼拝堂（写真上）は荘厳、でも何か愛らしいオシヤレを感じ、室内の美しさに疲れを忘れます。

ピンクとゴールド 白い大理石 お墓なのに日本では少女趣味と言われそうです。



金色の擬宝珠の真下にナポレオンの柩がありました。（写真下）

地下一階部分にマホガニー色のゴンドラの様でもあり、昔の乳母車の



ような形の柩で一階の別の部屋に、もう一つお棺があります。

濃いグリーンに白い模様の大理石のお棺には胴に *one* の文字が。三世ではないでしょうか。三世の父はルイ・ボナバルトでナポレオンの二番目の弟。

母はジョセフィーヌの最初の夫の娘オルタンスです。だから（ルイ・ナポレオン）であるナポレオン三世はナポレオンの甥であって、ジョセフィーヌの孫です。

伯父と甥が一つ屋根の下で眠っている。清々しい気分になりました。

今から152年昔、1861年12月15日雪の降る極寒の一日、五十万人のフランス人パリ市民が、ルアーブルからセーヌ川を遡って来るナポレオンの柩の凱旋を、待ち続けたそうです。



《22日》お世話になったスクリーフホテルを後にしました。ニースへ！

午後から、ニースマイバスのシルバウさんの車で、モナコへ行きました。伊野部さんと宮地さんの希望の国モナコです。（写真は王宮前の二人）

上品で美しいアメリカ女優のグレイス・ケリーとモナコ王レニエ三世の世紀の結婚、幸せの王妃

が車の事故で亡くなった時の哀しみもまた、世紀の悲しみでした。

カジノ・ド・モンテカルロとホテル・ド・パリ

流石にカジノ とてもサービスが良く写真にニコニコ入ってくれます。私は、モンテカルロと文字を読んだだけで、「遠くへ来たわ」と、喜びではなく、哀愁に近い気持ちになりました。



カジノの向かいに12年にモナコ皇太子が結婚式を挙げたホテル・ド・パリがあります。来賓の車で

ホテル前の広場は埋め尽くされたそうです。

(写真上はホテル・ド・パリ前の三人)

(写真下はモナコ大聖堂)

山上にエズの村と言う隠れ村が、石作りで残っ



ています。フラゴナール香水工場に行きました。左に地中海を見ながら山腹の十九坂を登りました。グレイス・ケリー妃と皇女の車の事故もこんな道だったかも知れません。夾竹桃が咲いているのを宮地さんが見つめました。

《23日》 シルバウさんの車でニースの市内観光をします。

小高い丘に登って、碧い地中海と赤い瓦屋根のニースの街並み、空も青く晴れています。温暖な気候で、18世紀から貴族の避寒、避暑地として豪華な館が建ち、今に残ってホテルや美術館になっているようです。昔は塩田で栄えたそうです。

シルバウさんは、神戸大学に留学していたそうですが、日本で良い仕事がないのでしようか。聞きはしませんでしたか……



ヨーロッパで一番大きなロシア正教の教会へ行きました。(写真上) 教会をバックに宮地さんと写真を撮っていると、ロシア人っぽい女の方が近づいて来てシャツターを切ってくれました。そして「アイラブユー」って言いました。突然の聞き慣れない言葉に「サンキュウ」も言えませんでしたし

た。この日私はラビットの手編みの帽子を被って、水牛の大きなクルスのペンダントをしていました。教会を訪れたのは偶然でした。

どんな時でも例え女性からでも「アイラブユー」はうれしい！

《23日の午後》

三人で海岸の散歩に出かけました。

帰ってきてから分かりましたが、フランスは十月末日までサマータイムです。だからパリの朝七時は暗かったのです。ニースに来てからその意味が分かりました。

まだ泳いでいます。海を見たら入りたい私ですが、不思議にそんな気持ち湧きませんでした。遠浅ではありません。後ろを向くと、陽光に映えるホテルが何処までも続いて見えます。



ネグレスコホテルのロビーで遊ぶ。

「シャレード」や「泥棒成金」などの舞台になったロビーには、18世紀の貴族の肖像画、食堂には、シャガール、ピカソ、マチスの絵画、地下にはお客様の生年月日のワインを用意しているとのこと。

オルセー美術館で叱られた私は、ヘッピリ腰でしたが、写真は撮り放題、
長居して遊びました。(写真はネグレスコホテルで撮影)



上はルイ十五世騎馬像の前で



下はナポレオン三世肖像画前の鍋島

今回の旅行は、交流の広い伊野部さんのお蔭で実現しました。自分の足で、自分の言葉で目的を達する事の面白さを味わせて貰いました。

ところが私には、この後最後の試練が待っていました。

飛行機はドゴール空港で三時間待って十一時にJLに乗る事になっていました。が乗り継ぎと言う英語もフランス語も知らなかったので、また入国税関へ並んだのです。

宮地さんがすんなり出て、私は隣の窓口へ行ったら「ジャポンジャポン」と言いながら列の後ろを指さして通してくれません。震え上がってしまいました。

「もう一回廻ってこい」と言われたのかと後尾について来直したら、すんなり通りました。

矢印の通り歩いて行くと伊野部さんに会えてほっとしました。でも伊野部さん



も宮地さんもJLの出発口が分からなくて困っていました。

それからどれ程歩いたことでしょう。尋ねようも誰もいない。

又税関に辿りつきパスポートを見せたら、二階の4と言いました。ところが階段が無い。三時間が瞬く間に過ぎていきます。

さっきの税関の前にたむろしていた制服の青年にチケットを見せて

「イレブン！」と叫びました。

伊野部さんの「一生懸命言ったら一生懸命聞いてくれるよ」その通りでした。

(終わり)